KUDAN SECONDARY SCHOOL —— PRINCIPAL'S LETTER

千代田区立九段中等教育学校　校長室だより

第１号 | 令和８年４月号 | April 2026

令和8年4月30日

校　長　富川　麗子

この4月に都立南多摩中等教育学校から千代田区立九段中等教育学校の校長に転任した富川　麗子（とみかわ　れいこ）と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

早いもので本校に着任して一か月となりました。その間、始業式・入学式・全学年の保護者会・天体観望会・約８割の教員の授業観察等を行ってまいりました。毎日が発見の連続です。

新年度にあたり、皆様にご挨拶申し上げるとともに、私自身の経験を交えながら、本校の教育の柱の一つである「探究」についてお伝えしたいと思います。

## 私自身の「探究」との出会い

前任校での二学期終業式・修了式において、「自分自身の探究との出会い」について話をしました。実は、前任校には、昭和 20 年代に家庭科の教員として在籍し、全国にホームプロジェクトを広めた先生がいらっしゃいました。私はその歴史を紐解いていったとき、偶然とは思えない不思議な縁を感じました。なぜなら、私自身が高校生の時にホームプロジェクトを実践し、その経験が今の探究観につながっているからです。探究という言葉が一般的になるずっと前、私が高校生だった頃にも、実は探究の芽は確かに存在していました。それが、家庭科の授業で取り組んだ「ホームプロジェクト」です。

ホームプロジェクトとは、家庭科で学んだ知識や技術をもとに、家庭生活の中にある課題を自ら見つけ、計画・実践・評価するという学習活動です。今でいう「探究学習」の原型とも言える取り組みであり、家庭科教育の中で長く受け継がれてきました。

## セーラー服をリフォームした高校時代のホームプロジェクトへの取り組み

私が最初に「自分で課題を見つけ、解決しよう」と考えたのは、高校１年生の夏休みに行ったホームプロジェクトでした。母が作ってくれたセーラー服を中学校の３年間大切に着ていましたが、卒業後、「この思い出の詰まった服を、母のために形を変えて残したい」と考えました。

ちょうど家庭科の授業でベストの製作を学んだこともあり、「セーラー服をリフォームして、母にベストを作ろう」と決めました。今思えば、これが私の最初の探究でした。

「どの部分を使えばよいか」「デザインはどうするか」「どのように縫い直せば形になるのか」「母が喜んでくれるのはどんな仕上がりか」等、試行錯誤を重ねながら、私は自分の問いに向き合い、調べ、試し、失敗し、再挑戦しました。完成したベストを母に渡した時の笑顔は、今でも鮮明に覚えています。

## 夏休み明けのホームプロジェクト発表会

夏休み明けのクラスでの発表会は、今でも忘れられません。友達がそれぞれの家庭の課題や疑問を見つけ、検証し、工夫し、結果をまとめて発表する姿は、まさに探究そのものでした。

「寒天とゼラチンの違いを生かしたデザート作り」「家族が使いやすい収納」「洗濯物が乾きやすい条件は何か」等、問いの立て方も、実験の仕方も、考察の深さも、どれも個性にあふれていました。何十年も経った今でも、その光景を鮮明に思い出せるのは、学びが本物だったからだと思います。

## AI 時代だからこそ必要な「問いを立てる力」

今、AI が瞬時に答えを導き出してくれる時代になりました。だからこそ、私たちに求められるのは「問いを立てる力」です。AI は答えを出すことはできますが、「何を問うべきか」を決めるのは人間です。

ホームプロジェクトも探究も、すべては「問い」から始まります。問いが深ければ、学びも深くなる。問いが自分ごとであれば、学びは一生の財産になる。本校の生徒の皆さんには、ぜひ「自分の問い」を大切にしてほしいと思います。

## 本校と前任校に共通する「探究の文化」

今年度の始業式の日、本校の生徒の皆さんに、私の前任校と、この九段中等教育学校との不思議なつながりについて話をしました。実は、両校ともに、同じ 3 月 18 日に「探究の成果発表会」を実施していました。年度の締めくくりの日に、生徒の皆さんが自らの問いと向き合い、学びの成果を発信する。その営みが、まったく同じ日に行われていたことに、私は深い縁を感じました。

探究とは、答えのない問いに挑み続けることです。「なぜだろう」「どうしてだろう」と問いを持ち続け、自分の頭で考え、仲間と協働し、新しい価値を生み出していく。その姿勢は、これからの社会を生きる生徒の皆さんにとって、何より大切な力となることを話しました。

## 私自身も探究し続ける

探究は、生徒だけが行うものではありません。教職員も、そして校長である私自身も、学び続け、問い続ける存在でありたいと思います。教育の在り方、学校の未来、生徒の成長をどう支えるか。これらは、私にとっての終わりのない探究です。

皆様とともに、学び続ける学校をつくっていきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

❖ ❖ ❖